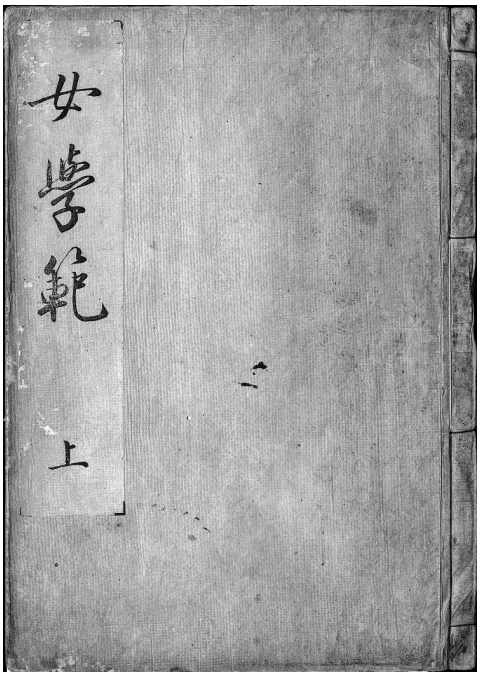
【聴楽017】近世の女筆手本（4-女筆手本類の筆者）――――――― 小泉吉永

第1章　大江資衡が選んだ女能書

•女性筆者による女筆手本類（女筆手本•女筆用文章•女筆往来物）の江戸期刊本は約120点（改題本を含む）
　長谷川妙躰23点　居初津奈が12点　沢田吉9点　小野通6点　春名須磨5点　長谷川品4点　窪田やす3点
　長谷川貞寿•長谷川縫•田村よし尾•万屋かめ各2点　＊以上の点数は最新情報を含まないため後述の作品数と一致しない
•柳亭種彦『足薪翁記』「淨瑠璃雑考[*1]」 → 妙貞尼、沢田お吉、此於通、寛永以後女の三能書といへり。
＊この認識は江戸中期の大江資衡（玄圃[*2]）にはなかった。大江には、今日伝わらない女筆手本に関する貴重な情報を多く含む明和5年（1768）刊『女学範』や安永6年（1777）刊『女早学問』、また、『名媛墨妙集』（古今女筆手本の筆跡を集めたもというが原本未発見）がある。

◆女学範



上巻末尾「書学（てならひ）」項に日本の女能書として光明皇后以下36人と作品27点を紹介。このうち、近世の女流書家と作品は次の通り（〈　〉は『女学範』の注記。＊印は『近世人名録集成』による補足。◎印は『女学範』『女早学問』の双方に記載、○印は『女学範』のみに記載。なお、×印は原本未発見）。

◎小野通〈太閤秀吉の政所•淀殿につかへたる人也〉　『四季女文章』『女筆春の錦』『和歌往事集[*3]』
＊「号、身葉子。不知没年。（墓所、江戸）金杉町新屋敷」「小野氏於（ヲ）通ト云。信長公ノ侍女。才女ノ名アリ。又、書ヲ能ス」
◎佐々木照元〈志須摩（ママ）の女〉　『千字文』『三体詩絶句』
＊「志津磨ノ女。晦山ノ妹ナリ。書法ヲ父ニ受テ筆力遒健（しゅうけん）ニシテ大イニ称誉セラレ其名甚高ク求メテ請フモノ多シ」
◎古屋潤照〈古屋氏。粟津某母〉
◎長谷川妙躰〈筆海子と号す。京都人〉　『女筆指南集』『女筆さゞれ石』『女筆難波津』
◎長谷川貞[*4]　『女筆雲井鶴』『女筆しの薄』
○長谷川富

◎長谷川志奈（品）　『女筆みよし野』
○長谷川佐世（さよ）
◎植村尾上（をのゑ）
○居初津奈（みそめ）　『女実語教』
◎林蘭〈大坂の人〉　『女教文章鑑』
○荒木慈忍〈伊勢の人〉　『女筆初音の道』
◎高木佐世　×『女筆小倉手本』
◎窪田津留〈大津の人〉　×『女今川姫鑑』
○沢田吉　×『女筆浅香山』
○宮城忠蔵母〈名は源[*5]〉
◎垣内須恵　×『女筆秋津風』
◎春名須磨〈大坂の人〉　『女筆色みどり』『女文章唐錦』
○宮崎競花[*6]　『女筆芦間鶴』
○富岡恵輪（ゑりん）
◎渤海鼎（ふかみ）〈名は鼎。字は麗華〉　×『千字文』　＊「渤海氏　名麗華。渤海春吾[*7]娘」「渤海氏　名麗華。大宮今出川下ル町。渤海氏女」
◎龍貞（りうてい）〈初の名は菊〉　＊「（龍草廬の）妾、菱氏。名、貞香。字、芽卿。小菊ト号ス。河内人。草書ヲ善クス。又、詩歌ニ巧ミナリ」
○龍貴（たか）
○龍輝（てる）[*8]　＊「草廬女子」
◎平信好（のぶよし）[*9]母〈名、登免（とめ）〉
○長谷川[*10]縫　『女筆都の春』
注:書家名を明らかにしないが、このほか『女今川百花香』（伝本なし）と『女五常訓』（坂本源兵衛作）の二本も女筆手本として掲げる。

◆女早学問

•『女学範』を簡略化。安永6年（1777）刊行。上巻「書学（てならひ）」項に、女能書23人、女筆手本類9点を載せる。
•『女学範』から『女早学問』への改編で沢田吉を削除　→「寛永以後女の三能書」が一般的でなかったことを物語る。

◆女子用往来に見える女流書家の略伝

○小野通[*11]

＊享保14年（1729）刊『女五常訓』頭書「日本女能書[*12]」

小野お通

おのゝおづうは、漢がく・呉学に通じ、もつとも和書にわたりて、はくがくたさいなり。よしつねあづまくだりを十二だんにつくり、上るり御ぜんのことをのべたり。今、是をつゞめて五だんの上るりといへることのはじめなり。さいちある事をこれにてしるべし。それのみにあらず。しゆせきにめうをゑて、たぐいなき者也。今、こうづの人のしたいて、ぢくの物となす。

＊延享元年（1744）刊『女文台綾嚢』前付の「小野於通が伝」

小野おづうは、山城の国、小野何某が女なり。むまれ付、艶にうつくしきのみならず、手跡世に類なく、ひろく和漢の文にわたりて才知ならびなき名女也。太閤秀吉公の政所淀殿に給仕せり。ある時、おつうが才能あるをもつて、「草紙書て参らせよ」との仰事あり。おづう思ひけるは、「貴命誠にいなみがたけれども、さうそくにそれぞと思ひよるかたもなく、かつ、其いにしへに女にて文詞のめてたきを残せし紫式部が『源氏』の巻々、清少が『枕草子』の種々妙なる筆力をふるひて企及ぶべきにも非す。又、かれに似よりたる事柄を書のべんも栄々しからず。今めかしく、にげなき事を」と思ひめぐらして、「十二段」といふ草紙を書て奉りける。淀殿、殊更に感じ給ひて、其文詞に節を付て歌はしめ給ふ。これ、浄瑠璃の始也とぞ。又、近代に板行せる『春の錦』と題せる文手本は、おづうが筆の跡なり。女子たるものは、おづうか才知を請ねがふべきなり。

＊早稲田大学図書館蔵本、元禄4年（1691）刊『〈四季〉女文章』下巻の旧蔵者書付によれば、ある時濃州大垣で、彼が中村某という知人に本書をなかば開いて見せたところ、中村氏が「この手本の筆者を当ててみようか」と言うので、「これは面白い、それでは一体誰の筆跡か」と問うと、中村氏は「大垣殿中にこれに似た女筆の散らし書きがあって、それは信長公の腰元の筆跡と聞いている。その女性ではないか」と答えたので大変感心した、従って、本書は小野通の真筆に違いないだろうと記す。また、朱筆で次のように記す。

或書に大坂高麗橋一丁目、ふぢや浅野弥兵衛
女筆春の錦　小野おつう筆　一冊
と有。此本別本か、此本歟。別本なるへし。板元相違候也。

→『女筆春の錦』は『〈四季〉女文章』と大半（収録書状の87％）が同じで、完全な別本とは言えない。『女筆春の錦』は明らかに享保19年（1734）以前の刊行だが、妙躰全盛期においても小野通の人気が衰えていなかったことを示す。

○佐々木照元[*13]

＊『女五常訓』の「日本女能書」

てるもとは、さゝきうぢのむすめ。ちゝのしづまがひつほうをゑたり。ひつりよく、女の筆とは見へず。『千字文』あるひは古文のぜんご「せきへきのふ」をかき、石摺となして世にひろむる。ちゝがひつほうをつたふといへども、七十二てん、みなふでのたてふしかはりて一ふうをなし、すみいろあいをいだす。つよきこと、羲之が石にいるといゑるも又とをからず。

＊明和9年（1772）刊『女用文章糸車』巻首[*14]

佐々木照元は、近代書法をもつて一家を建たる佐々木志津摩の娘なり。名をば「おてる」といへり。父の志津摩、常に教訓して云。「唐土の祭琰は、女ながら父祭邕が書法を伝へて今に至るまで其名誉を遺せり。汝、書家に生れて書を能せずんば、我門の家風を堕さん」と教訓す。これによつて、照元日夜学びて、遂に能筆の誉今の世に高し。『千字文』、又は前後の『赤壁賦』を書て今世間にあり。近代の能筆なり。

＊文化4年（1807）刊『新童子往来万福大成』前付「八書仙伝」→ 藤木甲斐守・佐々木照・南谷阿闍梨・烏石山人・松花堂・細井広沢・桑原為渓・大雅堂の8人中、女流書家は照元のみ。

佐々木照

剃髪して照元、字は由也と云へり。縉紳家の諸太夫の妻女なりしが、夫にはなれて後、父志須磨が書法を伝へて出藍の聞へ高し。誠につよき筆力、石に入といへるに遠からず。

○長谷川妙躰

＊明和9年（1772）刊『女用文章糸車』巻首

長谷川妙貞は其姓氏をしらず。いとけなきより御所に宮づかへせし時、妙喜尼といふ人に手跡を学ぶ事十二年なり。其後、御いとまを給はり、花洛の町に出て女子を集めて手跡を指南す。此時みづから妙喜尼の風を変して、一流の女筆を書出す。世に妙貞流と称し、例なき名誉を顕はす。近代にかくれなき能書なり。其書を評する者の云、「糸桜の春風に爛漫たるかごとし」といへり。

＊【参考】弘化5年（1848）刊『〈風俗〉名婦伝』

長谷川氏の娘は都の人なり。もとより二親に孝行厚く、和歌の道をよくす。中に筆道に達し、天が下に名を挙げしは、あまねく人の知る所也。今もなを長谷川流とて、女子の手習ふには此風を最第一とす。されば、流れを汲める者日に増し、弟子も大坂の橋の名におふ天満がき、長き代までも尊ぶは、をなごの誉れと申すべし。

往来物に紹介された女流書家はごく一部で、女流書家の多くが歴史に埋没し事跡の片鱗すら残していない。だが、最も重要な2人、居初津奈と長谷川妙躰[*15]については、断片的な情報からおぼろげながらその事蹟をたどることが可能。

第2章　女性らしさを重視した居初津奈（人物と作品）

◆居初津奈の作品

(1) 貞享5年（1688）『女百人一首』

(2) 貞享5年『女文章鑑』 → 改題本 (3) 享保5年『女中文章鑑』

(4) 元禄3年（1690）『女書翰初学抄』 → 改題本 (5) 元禄11年『女用文章大成』、(6) 元禄12年『当流女筆大全』、(7) 享保6年『女文庫高蒔絵』、(8) 元文3年（1738）『女文林宝袋』、(9) 宝暦5年（1755）『女通要文袋』＊他に元禄10年『女万用集』も(4)の模倣。このように『女書翰初学抄』が後世に与えた影響は甚大で、女筆手本中随一。

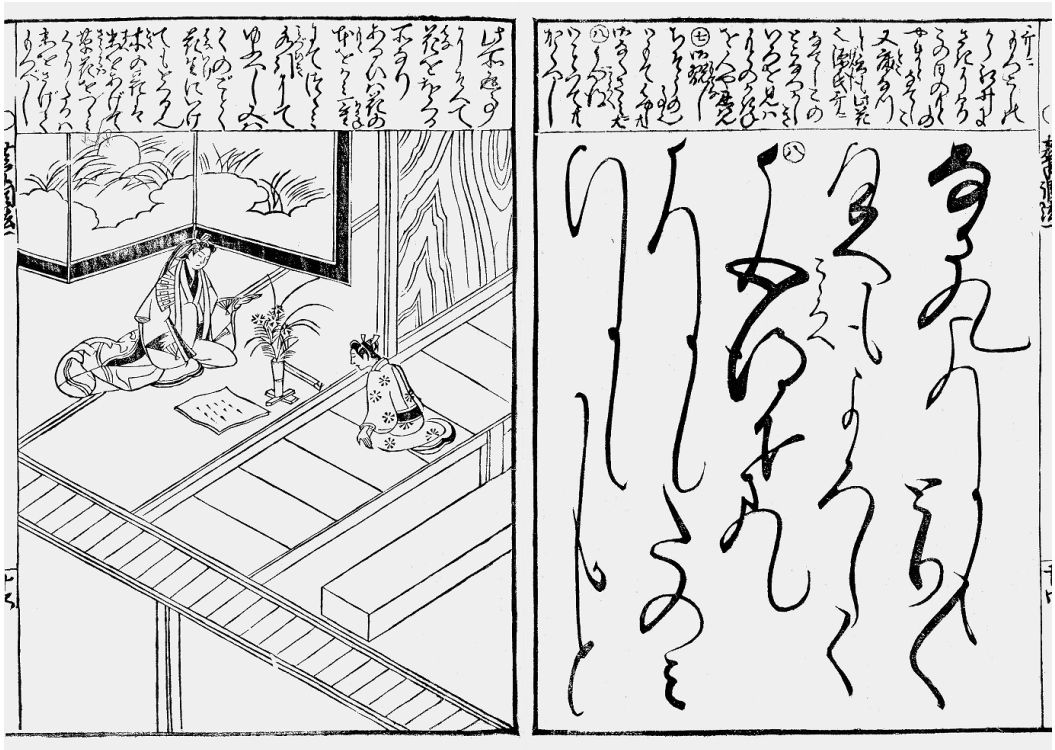
(10) 元禄7年『女教訓文章』

(11) 元禄8年『女実語教・女童子教』[*16]

(12) 元禄10年『女筆調法記』＊『重宝記資料集成』22巻所収（諫早図書館蔵本）、『三田村鳶魚全集』11巻99頁

(13) 享保11年（1726）『琵琶の海』＊津奈の遺稿を出版 → 改題本 (14) 延享4年（1747）『女文章都織』

(15) 明和頃×『女要今川教訓鑑』＊『明和9年書目』



◆居初津奈の事蹟

＊『女書翰初学抄』序文

天降る日那に生なる葛の葉のうらむる事は宿世のえにしぞかし。其道々のことわざを露しらまほしきには、且恋しきは都なめり。僕壮年の比、隙ある身となれり。よりて、日比の本意こゝなりと八重の汐路をしのぎて、今、此九重にいたりぬ。住事二十とせに及べり。つゐに思ふ道々をたどりて、其かたはしをうかゞひ、我身には足れりと是をたのしみ、隙行駒のあしなみを草のとざしにかぞへ、和国の風雅を味ふならし。爰にしれる人、一人の女子をもてり。是がために女文章のしるべならん事を書てよと望める事数多度なり。辞するに詞なくて、終に二札の文を書てあたへぬ。彼人よろこびて『女文章鑑』と名付り。それもいつしか書林の手に渡りて梓に彫て世に行へり。今一人の女子ありて、又此書を望めり。よつて、つたなき詞を綴て『女書翰初学抄』と名付。これ偏に初心のためなりといふ事しかり。

居初氏女都音書之

・寛永17年(1640)頃生まれ。　・30歳(壮年)頃上京し書画を学ぶ。　・40代後半に書家・画家として活躍。

・48歳頃、最初の著作＝貞享5年(1688)『女百人一首』　・55歳頃＝元禄8年(1695)『女実語教・女童子教』

・86歳頃?＝享保11年(1726)『琵琶の海』

○「自筆・自画」の作品が多く、類稀な才能の持ち主。

○女筆指南をしており、手本の執筆を求められることも多かった。

○独創的・個性的な著作。

・『女文章鑑』……「正しく女性らしい言葉遣い」を強調。

・『女書翰初学抄』……女用文章中最も詳細な施注。巻末の女性書札礼は後世に著しい影響を及ぼす。改題本や海賊版を含めると、『女書翰初学抄』ほど影響力を有した女用文章はない。

・『女文章都織』……女文形式で古典の教養を教える。『太平記』等の軍書を含む幅広い古典の教養を盛り込む点で異色。

◆女文章鑑が津奈の著作とする根拠

・貞享5年刊『女文章鑑』は、享保5年(1720)刊『女中文章鑑』の先行書。刊記は次の通り。

貞享五戊辰年三月吉日　　享保五庚子年三月吉日

高辻通雁金町　　高辻通雁金町

中村孫兵衛梓　　中村孫三良梓

・貞享5年刊『女文章鑑』に津奈の署名はないが、次の点から『女書翰初学抄』の序文の『女文章鑑』と同一と断言できる。

①書名・冊数・刊行年代・刊行地域の点で全く矛盾がないこと

②両者に共通する記述があること

女文章鑑	女書翰初学抄
【下巻末・書札礼】　あらたまの春のめてたさ。あらたまとは「新玉」とかく也。あたらしき玉といふ心也。玉とは物をほめて付たる詞也。縦ば「玉のすだれ」「玉の鈿」「玉手箱」などゝいふもほめたる詞也。「玉のおのこ御子」と『源氏』にもかけり。あらたまのはるは、めでたきとしの始也とほめたる詞也。歌「あら玉の年たちかへるあしたより　またるゝ物は鶯のこゑ」…	【上巻冒頭・頭注】　あらたまの春、「新玉」と書也。玉は万にほめてつける詞也。たとへば「玉すだれ」共、「玉のうてな」共いふがごとし。是をかへてかく時は、「あらたまりぬる春」とも。是、あたらしくとしのあらたまりたる心也。又は「立かへる春のめでたさ」共。是は去年の春のことしに立かへりたるやうに思ふ心也。歌に「あら玉の年立かへる朝より」ともよめり…
【下巻末「文かきやうの指南」第1条】　女文章は、とかく音にてよむやうにはずいぶんかゝぬがよし。…	【下巻末】　女文はいかにもやさしくあるべし。我、先の書にいひたるごとく、女性の文は詞をこゑにつかはず、読にてつかひ給ふべし。…

＊以上のように、『女文章鑑』が居初津奈の著作であることはほとんど疑う余地がない。

◆津奈の著作（1）女文章鑑

・2巻2冊。上巻には序文及び消息例文20例、下巻には消息例文12例と女性書札礼を収録。
・女文の基本的な例文や作法を教えた初心者向けの女用文章 → 「正しく女性らしい言葉遣い」を強調。手紙は、誤った言葉や俗語、男言葉を使わずに、四季にふさわしい言葉で書くべき。

女文章鑑序

詞にあやまりと俗語とあり。あやまりはかたこと、俗語は下輩のいひふらすことなり。つねにかやうのさかひをわきまへたゞすへし。分て女性のことば・文章なとは、たとひ正言にても男のことばと、おんなのことばとのかはりあれは、おとことばをはふみにはかくへからず。今此文章は、おもてにさま々々のあやまり文章をかき、かたはらに注をくはへ、うらに正風躰をかきぬ。すゑの巻には女こと葉の消息にもちゆる事、ならびに四季の詞を考しるし侍りぬ。心をつけてまなひ給はゝ、是、女の童の文章に心ざしあらん、あさきよりふかきに至り給ふたよりともならんかし。

【例文】

（あやまり文章）

先度は御こしの所にふた々々と御帰にて、なに事も申さす、さて々々御残多存まいらせ候。近きうちにかならす々々御出まちまいらせ候。かしく

（細注）

＊「先度」「ふた々々」「近きうち」の3カ所

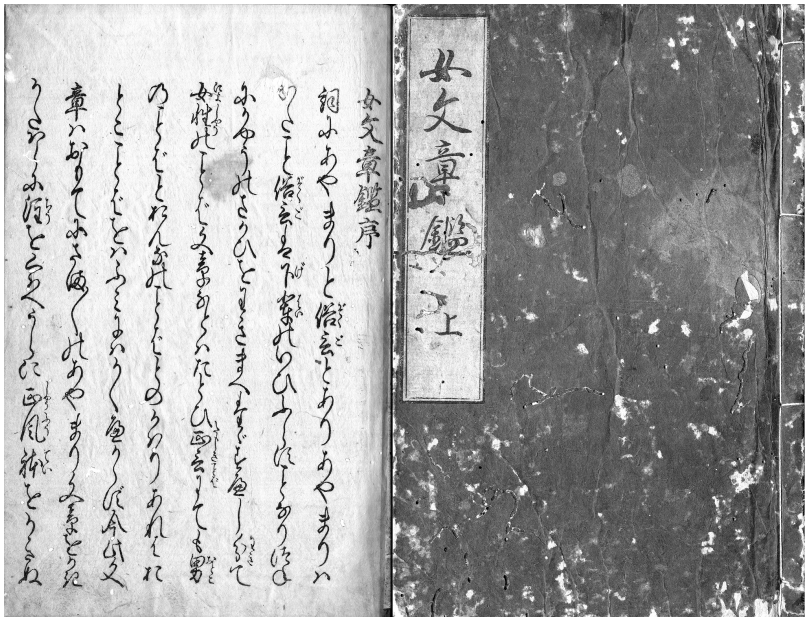
○「先度」、女性の文躰にかたし。「ひとひ」「いつそや」「せんもし」と書へし。

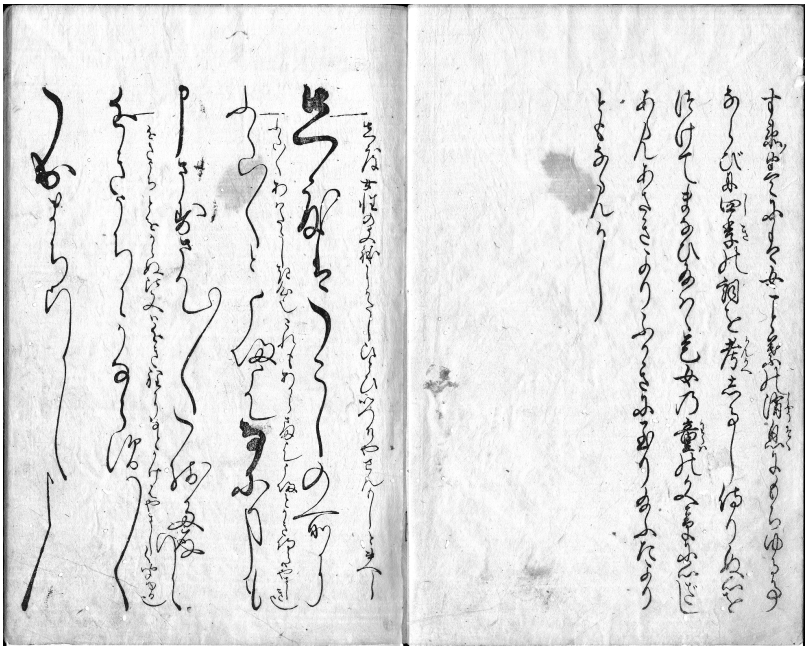
○「ふた々々」、あはたゝしき心也。これも「あからさまにて御帰」とかき侍らはやさしき也。

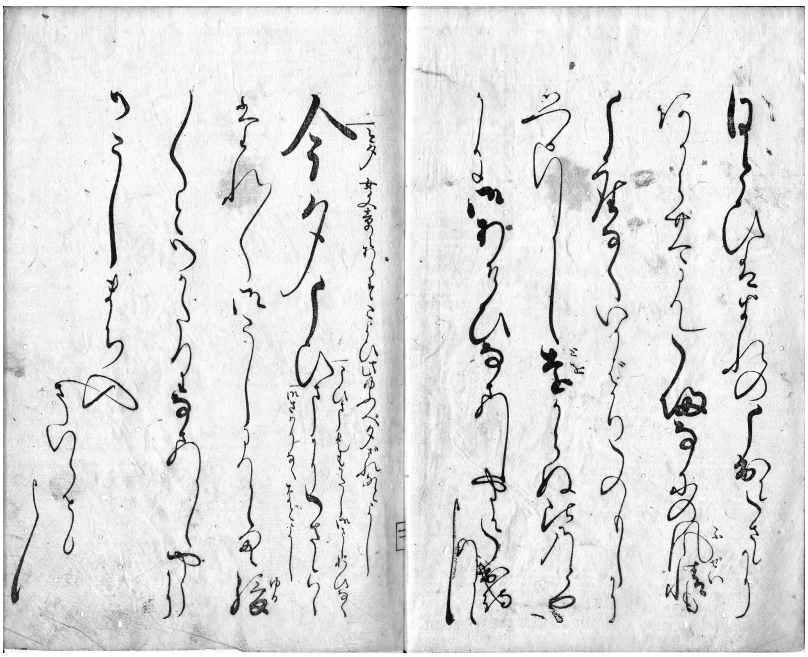
○「近きうち」、「とをからぬ比」又は「近き程に」なとかけは、やさしく聞ゆる也。

（模範文「正風躰」）

日とひは、まれの御出に御さ候に、あからさまにて御帰、なにの風情も御座なく、いかばかり御のもしに思ひまいらせ候。遠からぬ比、のとやかに御あそひなされ候やうに御出待まいらせ候。かしく







・下巻末尾・女性書札礼（要旨）

〇女文章は「めづらしき字」を書いてはならない。仮名文字で書くのが優しくて良い。ただし仮名遣いにも作法があるのでそれを弁えておく必要がある。また、本来は誤りであるが女文に慣例となっている言葉遣いもある。例えば「いはひ（祝い）」は、「ゐはい（位牌）」と読み違えやすく相手に不快感を与えかねないので、わざと「いわゐ」と書くが、これは昔から御所方でも行われてきた慣習である。

〇女文章にはとにかく字音を用いないようにする。「こんにち」「みやうにち」「せんどは」「せん月」「去年」「当年」「来春」「びんぎ（便宜＝音信）」といった言葉は堅い表現で聞き難い。「けふ」「あす」「あさて」「きのふ」「いつそや」「さきのつき」「こぞ」「ことし」「くる春」「あけのはる」「たより」などは柔らかい表現で良い。

〇女文に「夕（ゆうべ）」は悪くないが「よべ」とするとより優しい。「かはる御事なく」も良いが「たがふ事」の方が優しい。「御きあひあしきよし」よりも「御きそくつねならぬよし」「れいならぬ」「すくれず御はしまし候よし」などの方が優しい。逆に「けさ程」を「けさがた」としたり、「がてん」をつめて「がつてん」とするのは賤しい言葉遣いである。「御物遠」は使わず「御うと々々しく」「御とを々々しく」と書くのが良い。このほか、総じて女文には「御」の字を付けると良い。

◆津奈の著作（2）女書翰初学抄

・知人の要望により著した初心者用の女用文章。執筆動機・対象者などは『女文章鑑』と同様だが、次の点で異なる。

①『女書翰初学抄』は例文の多様性に配慮が見られ、各例文が目次で一覧できる。主題に合わせて散らし書き・並べ書きや、追伸文の有無などを適宜使い分け、より実用的・実際的な書簡形式と内容を備えている点

②『女書翰初学抄』の語注は全て頭書とし詳細に施注。注釈内容も年中行事故実や書簡用語・作法、名所旧跡、異名、古典、風俗・習慣、仏教など多方面に及び、出典を明記する考証的姿勢が目立つ点。

③書簡用語や書簡作法についての記述が整理され、より見やすくなった。①や②とも関連するが、『女書翰初学抄』には編集上の注意がよく行き届いている点（初めから出版を意図していたことを示す）。

・例文は全て月次順で、上巻には1-5月の例文（「正月初（はじめ）て遣（つかはす）文之事」以下21通）、中巻には5-10月の例文（「五月雨（さみだれ）に遣（つかふ）文之事」以下21通[*17]）、下巻は11-12月の例文（「雪（ゆき）のふりたる時遣（つかはす）文之事」以下15通と付録記事6項）を収録。いずれも四季時候の手紙が主で、用件中心の例文や弔状なども含む。上巻はほぼ散らし書き、中・下巻はほぼ並べ書き。

・中巻第1状「五月雨に遣文之事」

晴まなき五月雨（さみだれ）にて御座候。此徒然（つれづれ）いかゞ御わたり候哉。爰元（こもと）の事御すもじ給り候べく候。さやうに御ざ候へは、申兼（かね）候得（へ）ども、『源氏（げんじ）ものがたり』『狭衣（さごろも）』『伊勢物語（いせものがたり）』『栄花（えいくわ）ものかたり』『枕双紙（まくらざうし）』、このうちいづれにても御かしたのみ入まいらせ候。かしく

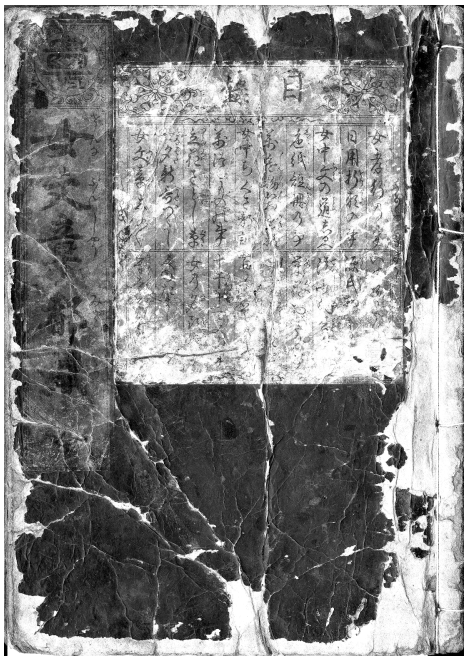
→ 返状も同様で、『土佐日記』『無名抄』『撰集抄』『太子伝』『うつぼ物語』『竹取物語』『住吉物語』などを文中に列挙し、頭書でも解説。享保11年刊『琵琶の海（女文章都織）』は本例文の趣向を全編に拡張したもの。

◆津奈の著作（3）女文章都織（琵琶の海）

・津奈の遺稿を出版したもので、延享4年（1747）に大阪書肆・安井弥兵衛によって板行。

・刊記に「筆作、居初氏津奈　補綴、田中友水子　画工、寺井重信図」と記す。

＊その後、本書に先行する享保11年（1726）刊『琵琶の海』を発見。



・撰作年代は、頭書中に『女今川』2冊本の表記があるので貞享4年（1687）以降。ただし、元禄13年（1700）刊の『女今川』（沢田吉作）には触れていない。また『女書翰初学抄』序文から想像される津奈の著作の執筆傾向や出版の経緯から、『女書翰初学抄』以後とするのが自然であるため、『琵琶の海（女文章都織）』の撰作年代を元禄3～12年頃としておく。

・本書は消息文や頭書に古典の知識を数多く盛り込んだ異色の女用文章で、『伊勢』『源氏』『枕草子』『万葉集』『百人一首』などの古典の教科書と言った方が妥当である。例えば、新年状の返事（第二状）は次の通り。

春のはじめのめてたさの品々、仰の通に申おさめまいらせ候。『伊勢物語』題号の事は、在中将の自作共、伊せへかりの使に行給し故なと、とり〳〵申候へ共、京極黄門のこゝろは伊勢と申女の筆作に定らるゝ由、聞馴まいらせ候。業平の御事をつゝみて、それとはなしに書たるよし、まことに優なる詞づかひ、今の世には類あらしと覚え候。殊に十三のとし、いとけなふしてと御座さふらへは、昔人と申なから、ためしまれなる御事共に候。猶、御けんにて。めてたくかしく

このように古典を主内容とした比較的長文の文面である。その頭書には、『伊勢物語』の題号、作者考（諸説および略伝）、同物語中に登場する女性名や皇帝名など、関連記事を盛り沢山に載せる。他の例文も全て古典の教養を主眼にしたもので、その概要を示せば次の通りである。

①女の持つべき本として『伊勢物語』を贈る新年状
②『伊勢物語』題号の由来を述べた新年状の礼状
③紫式部を偲ぶ石山詣の感想や『源氏物語』についての文
④参詣成就の祝儀とともに『源氏物語』執筆の経緯を述べた文
⑤深まりゆく秋に『狭衣物語』を読んだ感想と、訪問を請う文
⑥昨晩の訪問の御礼と『枕草子』を紹介する文
⑦婚礼祝儀に『栄花物語』を贈る文
⑧婚礼祝儀のお礼とともに『栄花物語』の概要について述べた文
⑨和歌初学者へ『万葉集』の作者などについて述べた文
⑩その返状として『万葉集』の概要にふれた文
⑪初めて会った人への挨拶とともに『百人一首』の作者について述べた文
⑫その返事に『徒然草』について懇談したいと訪問を請う文
⑬結納祝儀とともに婚礼道具の歌書・草子類吟味の依頼を承知する文（『古今集』『大和物語』など多くの書名を列記）
⑭その返状で適切な選定を願うとの文
⑮珍客の仲介に対する礼と『太平記』を紹介する文
⑯その返事に『保元物語』『平治物語』について述べた文
⑰日待ち[*18] の際の礼と『平家物語』について述べた文
⑱その返事に訪問の礼とともに『源平盛衰記』を薦める文
⑲女舞見物の報告と『義経記』についての文
⑳その返事に『曽我物語』について述べた文

以上のように、日常やりとりする手紙の体裁を保ちつつ、全ての例文に古典の知識を採り入れてあるのが特徴である。中でも異色なのが『太平記』以下の軍書を扱っている点で、このような記事を伴う女子用往来は他に例がない。

さらに頭書にも多くの書物について言及しており、御伽草子・物語（歌物語・歴史物語・軍記物語・説話物語・作り物語等）・随筆・歌集・類題和歌集・歌学書・史書・女訓書など、本書には実に80に及ぶ書名が登場する。津奈の教養の一端を知るとともに、津奈が女性の教養書をかなり広範囲に考え、独自の見解を持っていたことを示唆する。

◆津奈の著作の独自性

以上の著作は三種三様であるとともに、いずれも他の女用文章には見られない独自性を持つ。

まず『女文章鑑』は、女性らしい、正しい言葉遣いを徹底してマスターするためのテキストであった。その「正誤文例対照法」とも呼ぶべき方法は全く独創的であったが、本書はあくまでも初歩教材であって、日常の手紙の案文集として十分に利用できるものではなかった。目次もなければ見出しもなく、第一、例文の種類が少なすぎるからである。

しかし、「女性らしい言葉遣い」に執着した津奈の書札礼は、それまでの書札礼とは趣を異にするものだった。逆に津奈以降の女性書札礼においては、手紙における女性らしさが強調されるようになった感がある。近世の女性書札礼は、時代とともに作法が広範かつ細部に行き渡ると同時に言葉遣いに関する記述が多くなっているが、その最初のものが『女文章鑑』であった。

さらに2年後の『女書翰初学抄』は、例文の内容もずっと豊富になり、書止語「かしく」や散らし書き・並べ書きを適宜使い分けるなど実用書簡の例文集として十分な内容を備えただけではなく、江戸時代の女子用往来中最も詳細な注を用意してあった。頭書の替え言葉で例文の文言を随時変えられ、一層バラエティに富んだ表現も可能となった。また、下巻末の用語集や書簡作法集などと並行して使用するうちに、語彙そのものや関連知識の理解も進み、的確な手紙文を習得できたであろう。本書以後に生まれた種々の改題本の影響も含めれば、『女書翰初学抄』ほど多くの女性に読まれた女用文章はないといっても過言ではない。

それでは、『女書翰初学抄』が多くの類書を生んだのはなぜか。

第一に、実際に手紙を書いていて役立つ情報が多いという実用性であろう。言うまでもなく巻末や頭書の付録記事である。また、頭書注釈には注番号を付記して問題の箇所が即座に分かるようになっていた。

第二に、女性自身の著作であったこと。本書の女性書札礼は「文の法式さま々々ある事ながら、女性はさのみこまかなる法をたゞし給はずとも越度（おちど）にはなるまじ」という方針に貫かれ、必要最小限の知識に絞られていた。その反面、女性らしい言葉遣いには最大限の注意が払われていた。男性側からの女性書札礼は多く「男性」作法の簡略版のごときもので、「女性」らしさへの着目は乏しくなりがちであった。中世以来の書札礼の伝統がそれを物語っているし、津奈の言う「こまかなる法」の方向に一層進んで行った江戸中期以降の女性書札礼はほとんど男性によるものであった。

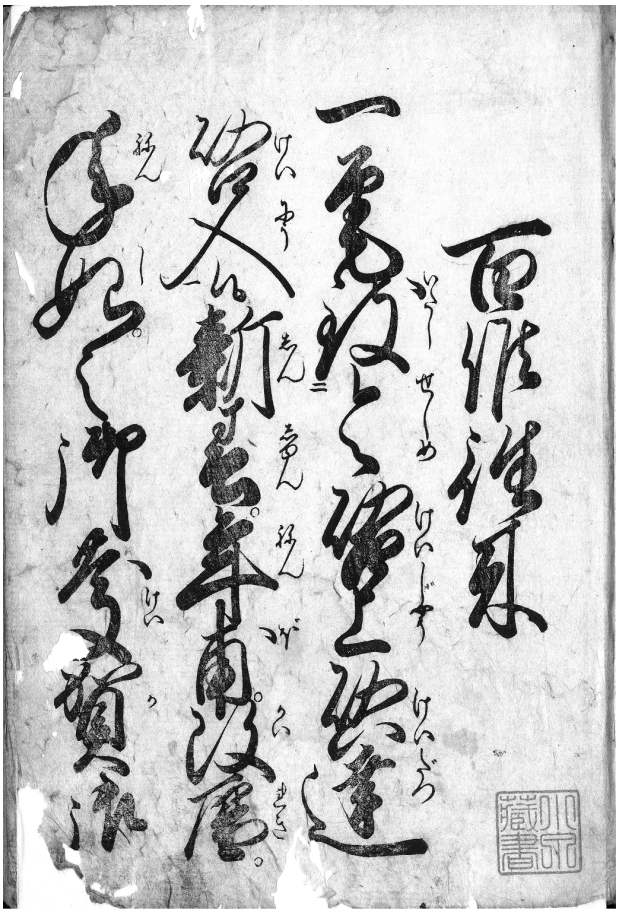
第三に、性差を重視する一方で身分差を強調しなかったこと。津奈は、特定階級の女性というよりもあらゆる女性を意識して書いている。つまり『女書翰初学抄』は全ての女性のための女文の基本であり、汎用性に富んだ女用文章であった（これ以後、女用文章の一般傾向となるが）。従来の書簡作法の関心事はもっぱら尊卑・上中下別の作法であった。江戸前期を代表する代表的女性書札礼を含む『をむなかゝ見』や『女式目』では、上輩・同輩・下輩のそれぞれに上下の差を付けた6段階または5段階の例文を具体的に掲げて、書簡用語や言葉遣いの違い、差出人名・宛名・脇付等の語句の高さ、また、「御」の字のくずし加減までを考慮した記述が見られた。これらに比べると、津奈は尊卑の差をことさら強調することはなかった。あるいは、初心者用としてあえて取り上げなかったのかもしれない。少なくとも確かなことは、津奈が尊卑の別よりも男女の別に最大の注意を払っていたということである。

他方、消息文中に古典知識を盛り込むという『女文章都織』の趣向は、既に『女書翰初学抄』中にその萌芽が見られた。消息文中に諸知識を含ませて、その両者を同時に学習させるという文章スタイルは、まさに往来物の常套手段であった。『庭訓往来』を始め多くの往来物が消息文中に各種の単語集団を挟むという形で、諸知識の並行学習を達成できるように目論まれた。やがて単語ばかりでなく、それに関連する諸知識や教訓なども含むようになった。

一例をあげれば、寛文9年（1669）刊『江戸往来』は新年状風の「陽春之慶賀珍重々々」という書き出しで始まり、江戸の地誌に関する諸知識を列記した後で「免伝多久穴賢（めでたくあなかしこ）」と書き止めるように、全編が一通の手紙文スタイルで書かれている。また、「消息往来」型の先駆と考えられる貞享4年（1687）刊『百候往来』は全26通の書状を収録するが、例えば上巻第1状は

> 一筆致（いたし）令啓（せしめけいじやう）上、啓達（けいだつ）、啓入（けいにう）候。新春（しんしゆん）、年甫（ねんぽ）、改暦（かいれき）、年始（ねんし）之御慶賀（けいか）、御吉慶（きつしん）、御嘉例（かれい）、御佳事（かじ）、重畳（ちやうでう）、目出度（めでたく）、珍重（ちんちやう）、不可有尽期（べからずあるじんご）、際限（さいげん）、休期（きうご）候。…

のように、消息に多用する類語を次々列挙し、書止に「恐々謹言」または「謹言」を置くものであった。



つまり、両者の例から明らかなように、冒頭と文末・書止等は一応書簡形式にしてあるが、文面のほとんどが語彙や知識、教訓の羅列であって、実際に用いる消息文ではない。これは往来物に特有の文体で、「往来文」とも呼ぶべきものである。このスタイルは津奈の独創ではないが、「往来文」を用いてもっぱら古典の知識を紹介した点がユニークであった。

このように見てくると、津奈の三つの女用文章はそれぞれ、他の女用文章には見られない顕著な独自性を持つものであったことが知れよう。

女性の視点から編まれた津奈の往来物は、独創性と個性に満ちており、書札礼のみならず女性の心得や教養の面で近世女性の大きな指針となったと思われる。第5章で紹介するように、女性書札礼の点からも、津奈は一般女性のために手紙の基本事項を簡潔に説いた先駆者であり、書札礼の庶民化に多大な貢献をしている。

第3章　芸術性を追求した長谷川妙躰（人物と作品）

◆長谷川妙躰の事蹟

＊『女用文章糸車』の記事 → 妙躰の事跡を知るほぼ唯一の記述

妙躰は幼時より御所奉公したが、その間12年間にわたり妙喜尼という女性に手跡を学び、その後、京都の町内で女子を集めて手習いを指南。そしてこの頃に、妙喜尼の書風から一変して独自の書流を起こしたのであった。世間ではこれを「妙貞流」と呼び、彼女は類稀な名声を得て、近代一流の能書となった。

＊文化15年（1818）刊『本朝古今新増書画便覧』[*19] → 妙貞尼（メウテイニ）。長谷川氏。京師ノ人。書法一家ヲ成ス。世ニ妙貞流ト称ス。と記して、妙躰流の流行が事実であったことを裏付ける。妙躰の生没年や経歴についてはほとんど分かっていないが、江戸中期に一時代を風靡したことは、今日伝わる妙躰の女筆手本の圧倒的な数からも十分に想像される。

◆妙躰の署名

・最古の手本は、元禄7年（1694）刊『しのすゝき』 → 筆跡は妙躰と酷似するものの原本には署名なし。『女学範』では長谷川妙躰と長谷川貞を別人扱いにして『しのすゝき』を貞の作品とし、『享保14年書目』は妙躰と貞を区別して、これを妙躰の作品とする。また、『大坂本屋仲間記録』は本書を妙躰筆とする[*20]。一方、家蔵の『女筆春日野』には「洛陽四条小橋／長谷川貞書」の署名があり、『享保14年書目』は正しく貞筆と記すのに対して、『江戸出版書目』には長谷川妙貞筆と記す[*21]ように記述に食い違いがあるが、妙躰（妙貞）も貞も同一人と見るべきであろう（補注）。

［補註］ 本稿では、「居初津奈」と「長谷川妙躰」の表記を統一的に使用しているが、彼女たちが常にそのように署名していたわけではない。津奈の場合、例えば貞享5年刊『女百人一首』や元禄3年刊『女書翰初学抄』では「居初氏女都音（つね）」、元禄7年刊『女教訓文章』や元禄8年刊『女実語教・女童子教』では「居初（氏）女津奈」、彼女の死後出版されたと思われる延享4年刊『女文章都織』では「居初氏津奈」と記している。また長谷川妙躰については、初期の作品には署名のないものが多く、後に筆者名を記載する場合もあるが、概ね、出家（正徳初年頃）前に「長谷川豊」または「長谷川貞」、出家後に「長谷川妙躰（妙貞）」と署名したことが知られている。また、「筆海子」の号は明らかに出家前から使用しており、元禄初年頃に独自の書風を興した当初からの書号と考えられる。さらに出家後の作品には、「長谷川妙躰書」の署名のすぐ下に巾着模様の中に「妙治」の朱印が押されているものが多いが、これは彼女の別号と思われる。

・享保15年（1730）刊『女中庸瑪瑙箱』、同年刊『女筆春日野』巻末広告「女教訓女用物板行目録」

女筆しのすゝき　　長谷川氏　全一冊
女筆雲井（くもゐ）の鶴（つる）　　長谷川氏　全三冊[*22]
女筆春日野（かすかの）　　同氏筆　　全三冊

→ この3本は妙躰の比較的初期の作品で、この当時は「貞」と名乗っていたようだが、著作に記された署名や住所から、これらは『わかみどり』よりも先、すなわち宝永4年（1707）以前刊行の可能性が高い。

・その後、宝永4年刊『わかみどり』の上・中巻[*23] 末尾に、

洛陽四条立売
筆海子　長谷川氏豊女（書）

と署名しており、出家以前に「豊」と名乗り、「筆海子」と号したことが分かるが、「豊」は署名は本書のみである。

・出家後の法名「妙躰（妙貞）」の記載は、正徳3年（1713）刊『さゝれ石』の刊記が初見。

洛陽四条立売
筆海子　長谷川氏妙躰書

→ 宝永4年～正徳3年の6年間に落飾したか（『さゝれ石』上巻見返に妙躰と思われる尼僧姿の女性を描く）。

・出家時の年代を仮に40歳頃と仮定すると、妙躰は寛文末年～延宝初年頃の生まれとなる。彼女は若くして御所奉公に入り、少女時代に妙喜尼のもとで長期の手跡修行をし、引退後は手習指南を業としたが、この頃から独自の書風を起こしたが、それは『しのすゝき』を出版した元禄頃のことであろう。前田訣子（としこ）氏の言葉を借りれば、妙躰の「肥瘦の変化に富み、ふくよかなやわらかみとねばりをのこしながら、大胆に、のびのびと筆が運ばれ[*24]」た筆跡は、それまでには全く見られなかった独特のものであり、たちまち京の女性たちに評判になったようである。

＊宝永元年（1704）刊『みちしば』跋文

かつは世にもて習ふ『しのすゝき』、みたれて所々のたからとなれは、はちめかしく、もとより女筆の品およはすといへと…

→『しのすゝき』が刊行後間もなく京中の人々の定評を得たという。

•京都での妙躰の評判に注目していた京都書肆•表紙屋彦兵衛らの求めにより、妙躰はまず『わかみどり』を執筆、以後名声はますます高まり、複数の板元から種々の手本を出版することとなった。享保期には妙躰流手本の海賊版も出回ったとみえ、この頃から柏原屋板の妙躰手本には、次のような断り書きが付き物となる。

世に長谷川氏女筆と名付あらはせるもの数多ありといへとも、筆海子の号なきものは真筆にあらさる者也。

洛陽

筆海子　長谷川妙躰書㊞[*25]

•初期の作品、例えば、『さゝれ石』初板本の跋文は次のようなものであった。

此書は去方の所望によつて、若は童蒙の為にさゝれ石のいはほともならさらめやと筆を染る者也。

洛陽四条立売

筆海子　　長谷川妙躰書

→ これに続く正徳4年（1714）刊『難波津』も同様であり、先の断り書きが見えるのは享保（1716～36）以後である。

この時期は女筆手本出版のピークで、平均すれば毎年のように新しい手本が出版され、近世を通じて最も盛況だったが、この頃に妙躰手本の類似品が出回ったのであろう。ただし、現存本からはその様子をとらえることは困難で、宝暦12年（1762）刊『女筆初瀬川』が妙躰風を装った唯一の例である。妙躰が著名になればなるほど、これらの類似品をめぐって書肆間の競争が激化したのは当然で、要するに妙躰の人気の高さを示すものにほかならなかった。

•妙躰の門下にも女筆手本類を著した女性が出た。寛延2年（1749）刊『女教文海智恵嚢』の筆者•長谷川貞寿もその一人で、同書の板元跋文にこうある。

長谷川妙貞尼の書残されし女文の数々なる杜の落葉の数つもり、百に余り千に充てあまねく世に流布せるもの、幾そばくにかあらん。其流を汲て文の道に堪たる人多き中に、長谷川貞寿尼は正しく妙躰尼の骨法を伝へてきはめたる能書のほまれ世に高し。常々、女子に教へられし文どものありしを、せちに乞求め侍りて、『女文海智恵袋』と題し、桜木に寿き侍りて、朽やらぬ名誉を万代に伝ふといふ。

浪華書舗　白雲館識

→ 本書外題角書に「筆海子長谷川筆」と記し、刊記にも「筆海子　長谷川貞寿草書」と記載するため、貞寿は妙躰から「筆海子」の書号を贈られたのであろう。

•ただし、筆海子を名乗る女性はほかにも存在した。宝暦3年（1753）刊『女要文通筆海子』の序文には、

筆海子の号むべなるかな。長谷川の流れ絶ず、筆の海浪静にして、浜の真砂の数々世に伝りしもしほ草、手習ふ女の至宝となりぬ。近曽筆海子のひめ置れし草稿の中に一巻の文を得たり。…乙女子の教誡艸ともなさばやと、桜木に彫りて世に弘むるものならし。

宝暦三癸酉春　　洛陽　梅月堂敬書

とあり、いかにも妙躰の草稿を発見して上梓したかのような書きぶりだが、跋文には、

筆海子は先師•妙貞尼の書号にして、あまねく世人の知れる処也。それかし、長谷川のなかれをくみ、水上をけかすのそしりをまぬかれすといへ共、今、幸に筆海子の号をうけつき侍りぬ。よつて、此書の題号にそへ侍るのみ。

洛陽四条

筆海子　長谷川氏品書㊞

とあるから、貞寿と品の2人に「筆海子」の号が譲られたことになる。

•妙躰門下にも1人2人と作品を残す書家が出たが、妙躰の作品は、宝暦3年刊『長谷川筆の錦』と同4年刊『女教倭文庫[*26]』を最後に姿を消すから、この頃が妙躰の最晩年で80歳前後に達していたであろう（「長谷川氏妙貞七拾八歳書」と記した直筆の書が発見されている）。

•だが、貞寿の作品は『女教文海智恵嚢』とその改題本『女文硯四季文章』（明和5年刊）の2本のみ、品の作品も『女要文通筆海子』『女筆みよし野』（宝暦3年刊）の2本のみで、以後作品が途絶えているから、貞寿や品が妙躰流を再興することはなかった。ほかにも、長谷川氏を名乗る女流書家は多く、長谷川縫、長谷川富、長谷川佐世らが作品を遺している。いずれも妙躰門下と考えられるが、彼女たちも妙躰流を復活させることはなかった。

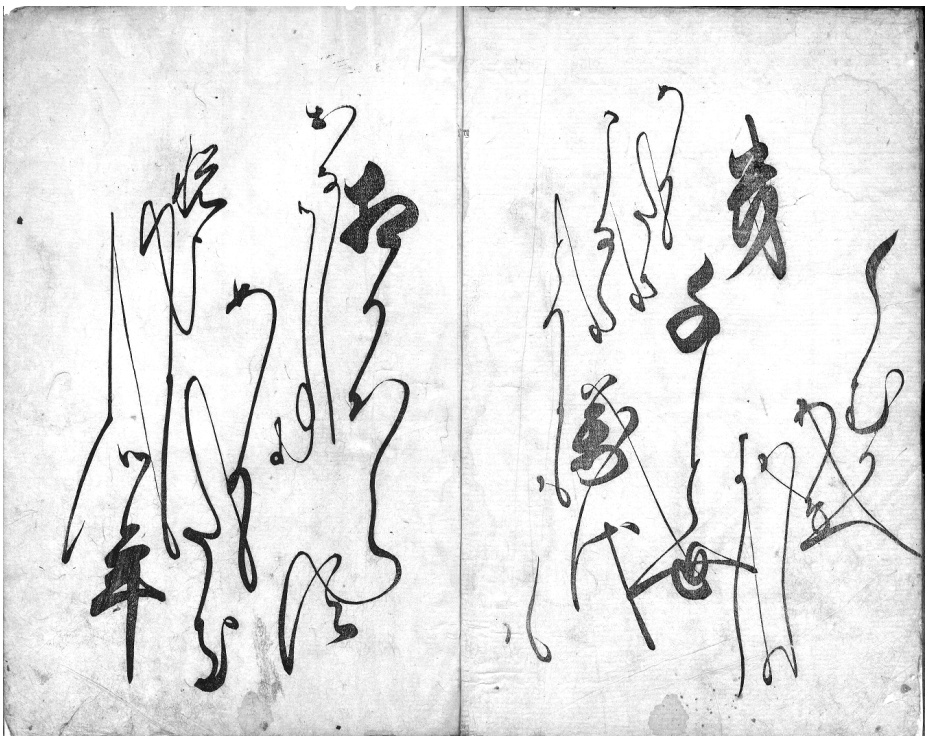
ただ、寛政2年（1790）刊『猿山四季かな文』広告中にも「長谷川女用文章」なる手本が見えるから、その後も妙躰流はごく少数の女性によって学ばれたと考えられる。しかし、宝暦後半からは女筆手本の新刊は激減しており、女筆手本が時代に取り残されていったのは明らかである。言わば、妙躰によって生まれた女筆ブームは妙躰の死によって終焉を迎えたのである。

◆妙躰の著作

(1)元禄7年（1694）『しのすゝき』→ 改題本（2）宝永6年（1709）『雲ゐの鶴』
(3)宝永4年（1707）『わかみどり』→ 改題本（4）江戸中期『女筆若みどり』
(5)正徳3年（1713）『女文字宝鑑』＊妙躰筆か
(6)正徳3年『女堪忍記大倭文[*27]』→ 改題本（7）明和5年（1768）『女文章色紙箱』
(8)正徳3年『さゞれ石』→ 改題・増補版（9）文化3年（1806）『女消息さゞれ石』
(10)正徳4年『難波津』→（同上＊「さゞれ石」＋「難波津」）
(11)享保10年『錦乃海』
(12)享保14年以前『女筆春日野』
(13)享保14年以前『女筆君が代』
(14)享保14年以前×『女筆藻塩草』＊「享保14年書目」で妙躰手本4冊の間に記載
(15)享保14年以前『女筆玉かつら』＊「妙躰正筆目録」に載せるため、妙躰筆か（早大文学、筑波大「散らし書手本」所蔵）
(16)享保18年『蝉小川』
(17)享保18年『近江八景』
(18)享保18年『千代見草』＊（19）文政7年（1824）『〈女用〉千代見艸』（小本）あり
(20)享保19年『女筆指南集』
(21)享保20年『見寿乃雪』→ 改題本（22）宝暦4年『女教倭文庫』
(23)享保20年『女筆続指南集』
(24)享保20年×『女筆続後指南集』（未刊）
(25)享保20年『女筆岩根の松』
(26)享保頃×『女筆百千鳥』＊明和5年『女中庸瑪瑙箱』広告中に「長谷川妙貞筆」と記す
(27)宝暦3年（1753）『長谷川筆の錦』
※他に宝暦3年『女筆みよし野（三吉野）』？

＊『女学範』『江戸出版書目』等は長谷川品筆とし、『大坂本屋仲間記録』および明和5年『女中庸瑪瑙箱』広告は妙躰筆とする。

・妙躰の手本は約60年間出版され続けた。
・妙躰の手本は、筆跡の独自性に比べて内容面での特色はあまり見られない。



＊『錦乃海』「手習の仕用の事」

（中巻）　筆の道は男も女も替る事なきながら、女子はたゞさらゝゝとやはらかに書を専とするなり。惣じて手先の芸は、手の内のれんま、心のあんばいにて見事を顕はす事に候へば、只草紙となく白紙となく、毎日おこたらず数へん習ふにしくはなく候。一へんにても多く手ならひいたし候程、紙あたり、筆ひやうし、心と手先とに自然とそなはり候。しかし、女子はやはらか成がよしとのみ心へて、くるゝゝ、ぬらゝゝとばかり書ては手はあがりかたく候。むかしより女の能書あまたさふらふに、何れも筆の道に叶はざるはなく候。筆の道と申すは、たとへば人の身にもほそき所、太き所、丸き所、平め成所有て、姿よくつり合候なり。面ていも高ひくなく瓜のごとく、手足もふとほそなく棒のごとくならば、生はたらく形にては有まじく候。其ごとく文字も点画のはり合有て、しかもふとき所にもたるゝ気味なく、細き所にぬかりたるよはみなきを生字[*28]と申候。

（下巻）　手跡ふしくれだつものにて、ひとへに筆を数へんはこひ、点画はこゝろにわすれずならふがかんようにて候。たとへば、てんくはくは材木のごとく、筆をはこぶは番匠のごとくにて、いづれがかけても家にはなりがたしとくふうあるべく候。爰に去人の手跡をすこしうつし、筆の道をことはり候。千万の字にても、此心にてよくゝゝさとりたまふべし。…

○筆道の根本が男女で変わるものではなく、日々の習練によって手跡の技と心の両面を磨くことが大切

○女性には女性らしい書き方があるが、常に柔和一辺倒の筆致ではならず、緩急自在で変化に富みながら、なおかつ全体の調和がとれた「生字」でなくてはならない

○手跡稽古の積み重ねで「運筆」「点画」「紙当たり」「筆拍子」などの基本が自然と身に付く

「生字」とは「生き働く字」、つまり「生命を宿したような躍動感のある字」といった意味に理解できるが、妙躰のあの独特な筆遣いは、ここでいう「生字」を体現したものにほかならなかった。

◆津奈と妙躰が

・居初津奈が文字の「点、引、捨、はねなどの所をながく書まじき也」（『女書翰初学抄』）と述べたのは、恐らく、元禄頃からはやり始めた妙躰流に対する批判であったと思われる。津奈が目指した女文は言わば「やさしさ」――文面におけるやさしさであり、字配りにおけるやさしさであった。妙躰の目指したものは「やわらかさ」であり、ある部分で共通点もあったが全く同じではなかった。妙躰は「やわらかさ」を基調としつつも、文字に込められた生命、点画や字配りにおける変化と調和を重視している点で微妙に異なる。

・妙躰には芸術家として書を追求する姿勢が強く感じられる。そしてそれはある意味で男女を超越したものであったと理解されるのである。津奈が身分を超越した女性らしさを強調したのに対し、妙躰が目指したものはいわば男女を越えた書の芸術性であった。

・津奈と妙躰の生きた時代にはほぼ30年の開きがあり、書家として活躍した時期は津奈が貞享～元禄期、妙躰が元禄期～宝暦初年であった。従って元禄期には、ほぼ50代に達した津奈と、まだ20代後半と思われる妙躰が、それぞれに近世の女筆文化をリードし、女流書家の輩出を促した。

・女筆の盛況が掘り起こした庶民出身の女流書家の一人に春名須磨がいる。彼女は享保9年（1724）刊『女筆いろみどり』と享保20年（1735）刊『女用文章唐錦』などを著したが、前者には「春名氏須磨十一歳書之」と記され、『享保14年書目』にも「須磨十一歳」と特筆[*29]されたが、彼女は播州佐用郡新宿村の百姓小三郎の娘であった[*30]。

・江戸後期の人名録には10歳に満たない女流書家も登場するようになった（＊は『近世人名録集成』所載頁）。

大島加根女（小紅。当七歳。雪城門。江戸）＊2巻175頁。

蘭香（田代孝女。名、馨子。今茲十三歳。越後）＊2巻445頁。

華山（藤田荻女。今茲十二。越後）＊2巻452頁。

•これらの天才少女を世に知らしめたのは出版物であり、書肆は出版すべき能書の筆跡を求めてやまなかった。

---

*1『日本随筆大成』第二期一四（昭和四九年　吉川弘文館）一五七頁。

*2『国書人名辞典』第一巻（平成五年　岩波書店）によれば、漢学者で、享保一四年（一七二九）五月生、寛政六年（一七九四）二月二五日没、六六歳。名、資衡。字、穉圭。通称、久川靱負。号、玄圃•時習堂。京都の人で、初め石田梅岩に師事し、のち龍草廬に詩と書法を、岡崎駒に古文を、更に長崎の劉図南に華音を、京都の安子貫に琴を学ぶ。書法はのち宮崎筠圃に学び、一家を成した。このほか森銑三•中島理壽『近世人名録集成』（昭和五一～五三年　勉誠社）第一巻四•一三•二四頁、同第四巻七八頁にも若干の記事を載せる。

*3『小野阿通』（大正六年　「大仏頂面六甲野老」著　＊著者の本名は不明）一八頁には、小野通が井上通と混同されやすいことに触れ、『女学範』もこの誤りを犯して井上通の『処女賦』『和歌往事集』を小野通の作としたことを指摘する。

*4『女学範』では長谷川妙躰と長谷川貞を別人のように記載するが、この二人は同一人であると考えられる。

*5 天和二年刊『当流 女用文章』の筆者•源女と同一人か。

*6 競花の名は『女筆芦間鶴』原本により補う。

*7『近世人名録集成』第一巻五頁に、「渤海保。字、士亨。号、北門。大宮今出川下ル町。渤海春吾」とある。親子ともに著名な京都の書家であった。

*8 龍輝は大江の師である龍草廬の娘であるが、前項「龍貴」も龍草廬や龍輝と血縁関係にあったものと想像される。

*9 平信好については、『近世人名録集成』第一巻五頁に「平信好。字、師古。号、廬門。黒門綾小路下ル町。岡崎平太」とある（同一三頁にも同じ記載がある）。また、同第四巻七九頁に「草廬門。岡崎廬門。名、信好。字、師古（シコ）。小字、平太。廬（ロ）門、又、彭斎（ホウ）ト号ス。京師人。詩ヲ善クス。天明七年三月二没ス。年五十四」とある。従って、平信好は大江資衡と同門であり、彼の母もまた江戸中期の京都の女流書家として知られていたのであろう。

*10『女学範』には単に「縫女書」とあるが、『江戸出版書目』七〇頁には「長谷川氏」と記す。

*11 小野通の出自や生涯については諸説あり、今のところ確証のある定説はない。そのため、『日本架空伝承人名事典』（平凡社）や『日本伝奇伝説大事典』（角川書店）などにも一項目をなすが、今、『日本歴史人物事典』（朝日新聞社）によってその一端を示せば、「阿通」「於通」とも書き、浄瑠璃作者の祖とされる伝説的な人物である。浄瑠璃の嚆矢「浄瑠璃御前物語」（「十二段草子」とも。一四七五年以前に成立）の作者に擬せられる。織田信長の侍女説に始まり、豊臣秀吉や淀君の侍女説、あるいは東福門院の侍女説など諸説あるが、浄瑠璃の起源や成立年代から考えていずれも疑わしい。その中で、美濃の武士•小野正秀の娘お通（一五六八～一六三一）が有力視されてきたのは、彼女が和歌に秀で、画や琴にも長じ、ことに能書家としての名声があったのを浄瑠璃作者に結びつけた結果という。いずれにしても伝説の域を出ない女性である。なお、お通は「おつう」ではなく「おづう」と濁るのが正しい。

*12 この記事に見える女流書家は、光明皇后•小野通•佐々木照元の三人である。本書の記事からしても、柳亭種彦の言う「寛永以後の女三能書」の認識は江戸中期には一般的でなかったことが想像されよう。なお『女五常訓』の享保一四年初板本（東京家政学院大学蔵）は未見のため、ここではそれに次いで古い元文三年板（家蔵）によった。

*13『国書人名辞典』第二巻によれば、生没年未詳、元禄～享保（一六八八～一七三六）頃の書家で京都人、名を照、字を由也といい、照元は通称である。佐々木志頭磨（一六一九～一六九五）の娘で、粟津信濃介の妻となった。父に学んで書をよくし、弟•佐々木晦山と共に父の書法を伝える。夫の没後、書を教授した。

*14 本書で取り上げた日本の女流書家は、光明皇后•佐々木照元•長谷川妙躰（記事は後掲）の三人である。これも柳亭種彦の指摘と異なる。

*15 この辺の事情については『江戸期おんな考』第七号（平成八年　桂文庫）の拙稿「近世刊行の女筆手本について」を参照。

*16 後に「女実語教」と「女童子教」の本文が一本化されて「女実語教」のみの書名となったものが多い。

*17 第一六状「紅葉を送る文之事」の返状は頭書欄に掲載されているため、これを含めれば二二通である。

*18 前夜から潔斎して寝ずに日の出を待って拝むこと。一般に正•五•九月の吉日を選んで行い、終夜酒宴を催す。（広辞苑）

*19 前掲『近世人名録集成』第四巻三五八頁。

*20 大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録』第一一巻（昭和六一年）二七六頁。

*21 樋口秀雄ほか編著『江戸出版書目』（昭和三七年　未刊国文資料刊行会）一四頁。

*22 かつて某古書店目録に写真掲載されたことがあった。やはり妙躰流の女筆手本で、題簽に『雲ゐの鶴』と記された三冊本であり、宝永六年伏見屋板と紹介されていた。この刊記は『しのすゝき』宝永六年後印本の刊記と同様のものであろう。

*23 本書は当初三冊本で、各巻の題簽題が別々であった。正確な題簽題は、上巻が「わかみとり」、中巻が「わかたけ」である。なお下巻の題簽題は「うすもみち」である。

*24 前田訣子「女性の書」（『書の日本史』第六巻　一九七五年　平凡社）八〇頁。

*25 ここには多く巾着型のデザインのなかに「妙治」と記した朱印が押されている。この「妙治」は妙躰の別号であろう。

*26 ただし『女教倭文庫』は、享保二〇年（一七三五）刊『見寿乃雪』の改題•増補版（口絵を増補）である。

*27 本書の改題本に明和五年刊『女文章色紙箱』がある。

*28 既に、笹山梅庵作、元禄6年『手習仕用集』に「大概文字勢ひありて能動き霊魂あるは生字なり。…点画釣合に離たるを死字と云と心得べし。病字其中に有と、老師申き」とあるように、「生字」は妙躰の造語ではないが、妙躰流の神髄はこの言葉に象徴されており、これを庶民女性に普及させるうえで重要な役割を果たしたと言えよう。

*29 この種の書籍目録に作者の年齢が付記されるのは、異例中の異例で、後にも先にもこの一例のみと思われる。

*30 大阪図書出版業組合編『享保以後 大阪出版書籍目録』（昭和一一年）二頁「女筆色緑」項。